

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

**\* 管理棟地下暖房ボイラー火入れ式の写真（東京天文台 100 周年記念誌資料 1-24）**

東京天文台 100 周年記念誌資料の整理をやっている。今回はアーカイブ室新聞第 346 号 (2010 年 6 月 9 日) の東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料—その 1—の

24) ボイラー (管理棟地下) 火入れ式写真 4 枚：ひどくピントが甘いと書かれた写真 4 枚である。

今の人には理解できないかもしれない。北研究棟・管理棟 (現在の中央棟北、中央) が完成して、使用を始めたのは 1966 年 (昭和 41 年) 5 月であった。この建物にはその時点では暖房設備がなかったのである。5 月だから暖房はなくてもよかったが、その年の冬には暖房なしでは済まされない。そこで真新しい研究室の各部屋に丸い石油ストーブが配られ、各階階段上に石油のポリタンクが置かれ給油して暖を取ったのである。

この建物に移ってきたのは、事務部は 14 号官舎 (台長官舎)、天文時部は、新しくできた管理棟西側にあった保時、報時室から、経度課は旧三鷹報時所から移ってきた。当時、天文時部は保時課、報時課、経度課の 3 つの課があった。子午線部の人たちは、ゴーチェ子午環の北にあった「辻研」と呼ばれた木造の建物から、太陽グループは本館 (一) と呼ばれた建物とモノクロの西にあった 3 号研究室から、測光部は現在の見学者用休憩室が建っている場所にあった測光部の建物、分光グループは本館 (二) と呼ばれた木造の建物から移ってきた。筆者は大沢先生の分光部に所属していた。電波のグループは当時は「ノイズ」と呼ばれていたゴーチェ子午環室南西にあった建物から移動してきた。

これらの木造の建物には石炭ストーブがあり、毎朝、石炭ストーブに火をつけるのが最初の仕事であった。石炭の名残は、現在のコスモス会館南側の竹やぶの中に残っている。コンクリートで囲われた高さ 1m ほどのところに向けて坂道がある場所が石炭の保管場所であった。

この新しい研究棟に、すべての研究室の人たちが移れたわけではなかった。台長をされていた広瀬先生の天体掃索部は本館 (一) と呼ばれた木造本館に残られた。北研究棟の 1 階南側には、新設の人工衛星国内計算施設が入り電子計算機「OKITAK5090」が置かれ、1 階西側には天文時部の保時、報時の設備が置かれ、時計などのラックが並べられていた。

昭和 20 年 2 月の旧本館焼失後、21 年間にわたって事務部は台長官舎で事務を執っていたのである。台長官舎は、2 階建ての大きな建物で、台長室もこの中であつた。台長官舎はその後合宿として用いられたり、外国人客員の宿舎になったりした後、コスモス会館に生まれ変わった。もはや事務部が長い間、台長官舎という住居として建てられた建物で事務を執っていたなどということは、このように書き留めておかねば忘れ去られるだろう。

その他、北研究棟 1 階北側には暗室、測定器室、女子更衣室が配置されていた。

これらの写真の入っていた封筒には「ボイラー火入れ式」とあり、写真裏のメモ書きには「本館ボイラー試運転」と書かれ、1967年3月8日の日付が入っている。3月といえばまだ寒く暖房が必要で、石油ストーブの給油がなくなりホッとした記憶がある。



写真 1



写真 2

写真 1 の一番手前の後ろ姿は、当時の広瀬台長である。写真 2 の左のネクタイ姿は当時の施設担当であった大田管理係長である。

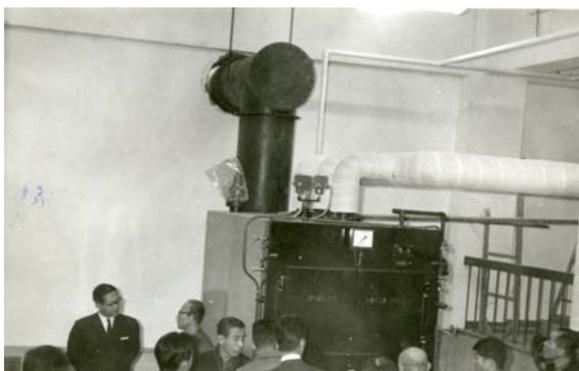


写真 3



写真 4

写真 3 は、写真 2 とほぼ同じ写真、写真 4 の左端の人は広瀬台長である。

この当時は、暖房は重油を使ったボイラーを焚いてお湯を各部屋に回す給湯暖房であった。この給湯暖房の配管も建物ができた当初には設置されておらず、後から設置工事があったことを覚えている。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)